

心理負担増える保育者

識者「社会の理解不可欠」

「目も手も足も忙しい」
8月中旬、夏休みの静けさに包まれた県西部の認定こども園の職員室。取材に応じた40代の保育教諭は、登園時間帯の慌ただしさを一言で表した。園児を教室

に迎え入れ、支度を見守り、時には保護者対応も。「忙しくて後回しにしてしまう事はやっぱりある。その中に紛れてしまったのだろうか」
牧之原市の認定こども園

届かぬ声

子どもの現場は今

「川崎幼稚園」で園児の河本千奈ちゃん(3)が送迎バスに置き去りにされて死亡した事件で、静岡地裁は7月、千奈ちゃんの所在確認を急った元担任(49)に禁錮1年、執行猶予3年の有罪判決を言い渡した。元担任は公判で、朝の時点で千奈ちゃんが事前に連絡のない欠席だと思ひ込み、その後当日の保育内容が急きよ変わったこともあり「活動の準備に忙しく、確認の気

持ちが薄れてしまった」などと供述した。
同園には事件当時、職員が園児の登降園をどの時点で確認するか、欠席の連絡がなく登園していない園児はいづ誰が保護者に連絡するか、といった明確なルールがなかった。地裁は元担任の過失には園のさまざまな安全管理体制が「大きく影響した」と指摘しつつ、他の業務を優先して千奈ちゃんの所在不明を放置した責任は「保育者として到底軽視できない」と断じた。前園長(75)に対する禁錮1年4月の実刑判決とともに、「現場」が裁かれた事実は保育関係者に重くのしかかった。

事件以降、こども園や幼稚園、保育園などで欠席確認や点呼業務は緊張感を増している。静岡市の認可保育園の50代保育士は「朝、誰が来ていないのかを確認して保護者に電話を入れる作業は、事務の先生を中心により厳重に行うようになった」と話す。同市の認定こども園は園外活動だけでなく、教室から園庭など敷地内移動の際も人数確認の結果をチェックリストに記

入るようになった。7月の判決は職員会議で内容を周知した。「園児の命を預かるという大前提の先に教育、保育活動があることを再認識したかった」と60代園長。一方で「現場の先生は大変だと思う」と心配も募る。

牧之原バス置き去り2年

▶上 判決の余波

ることを冷静に判断して適確に必要な行
ような本件幼稚園の杜撰な安全管理体制

供の命を預かる保育者として到底軽視
過失によって危険が現実化された偶

まえて量刑の公平性の観点から検討

静岡地裁は元担任の過失を「保育者として到底軽視できない」と断じた。一方で背景に園のさまざまな安全管理体制があったとした

「川崎幼稚園」で2022年9月、園児の河本千奈ちゃんが送迎バスに置き去りにされ、熱射病で死亡した事件は5日で2年となる。刑事裁判の判決、事件を機に送迎バスへ設置が義務化された安全装置は、子どもと向き合う現場にどのような変化を生じさせているのか。現状を探った。

「届かぬ声」取材班